第三中

意欲的に学び、友と高めあう生徒の育成

～「共有化」を意識した授業づくりを通して～

（３年計画の２年次）

校長　　前田　篤志

１　研究主題について

昨年度は「共有化を意識した授業づくり」を重点施策に掲げて取り組んできたが、コロナ禍において、どのように生徒同士のやり取りをしたり伝えあったりする場面を設定していくか、今後も模索していく必要があるという課題が挙げられた。その方法の一つとして、昨年度から導入された一人一台端末の活用方法についての研修を求める声も多い。

また、今年度から新学習指導要領が全面実施となり、問題解決的な学習を推進したり、３観点における評価について学んだりする必要がある。

本校生徒は、素直でまじめな生徒が多く、授業での学習態度はおおむね良好である。教師の説明を聞いたり与えられた課題を頑張ったりする受動的な学習には集中して取り組める生徒が多い反面、自分の意見を話すなど表現することが苦手な生徒も少なくない。

これらの現状を踏まえて、今年度の学校目標を「互いに認め合い、高めあえる生徒の育成」とし、重点施策を「＜共有化を意識した授業づくり＞友と学ぶ喜びをもって学習に取り組み、将来の目標に向かって努力する生徒」と設定した。自分の考えやわかったことについて仲間と交流する場面を意図的に設定することで、学びが深まるだけでなく、学習内容の一層の定着が期待される。さらには、探求的な学びや諸活動への意欲につなげていきたいと考え、上記主題を設定した。

２　研究のねらい

「共有化」を意識した場面を授業に意図的に取り入れる研究を通して、意欲的に学び、友と高めあう生徒の育成を図る。

３　研究仮説

(1) これまでの「焦点化・視覚化」の取組を全員で継続することで、「わかった！できた！身についた！」を実感させる授業づくりが進み、生徒一人一人が興味をもって主体的に授業に臨むようになる。

(2) 「共有化」を意識した場面を授業に取り入れることで、学びが深まるとともに学習内容の一層の定着が図られ、さらに探求的な学びへとつなげることができる。

４　研究内容

(1) 授業づくりの共通の取組として以下のことを職員間で共通理解する。

ア　本時のねらいを焦点化し、それを黒板の決まった場所に生徒に明示することにより、生徒が学習の見通しをもてるようにする。

イ　課題解決や振り返りの場面において、話合い活動等の「共有化」を意識した活動を取り入れる。

(2) 授業参観月間を設定して教員が互いの授業を公開し合い、「共有化」を有効に取り入れる授業改善を行う。

(3) 教科部会を設定して評価について話し合い、意欲的に学ぶ授業づくりにつなげる。

(4) 外部講師を招き、支援の必要な生徒への手立てについて学ぶ機会を設ける。

(5) 一人一台端末を「伝え合う、共有化」の手段として活用できるよう、研修の場を設ける。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	教科・授業者等
5	11	八戸市教育委員会教育指導課計画訪問
5	28	授業参観研修(小・中ジョイントスクール推進事業) ※中学校授業公開
11	26	授業参観研修(小・中ジョイントスクール推進事業)

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
4	21	特別支援教育に関しての研修 講師:本校通級学級・支援学級担当者
5	12	新学習指導要領・評価規準についての研修
8	19	『1人１台端末を活用した授業づくり』研修 講師:八戸市総合教育センター主任指導主事　石井一二三氏
10	13	1人１台端末の活用についての研修

６　研究の成果

(1) １人１台端末の利用について

①講師に依頼してリモートで研修することで、端末の基本的な操作方法やリモート研修の行い方について知ることができた。昨年度からの引き続きの研修を通して、操作方法についてより理解し、授業での「共有化」の場面においてどのように活用するかについて、考えを深めることができたと感じる。

②授業や家庭で端末を利用する際のルール等について、校内研修で時間を設けて話し合った。授業や家庭において、「タブレットを用いた課題を設けること」について、その意義等について考えを深めたり、適正なルールを決定したりすることができた。

(2) 新学習指導要領における評価規準について、全体で趣旨を再確認した上で各教科で話し合い、発表しあった。そのことで、３観点での評価をどのようにするかについて具体的なイメージがもて、授業づくりにもつながった。また、タブレットを用いて研修をすることで、これまであまりタブレットを使用してこなかった教員にも基本的な操作をする機会となった。

７　研究の課題

(1) 今年度は、タブレットを用いた授業づくりについて主に研修を重ねたが、基本的な操作方法から発展して、より「共有化」に特化した場面の設定等を研究していきたい。

(2) 支援の必要な生徒について、今年度も実施できなかった「講師を招いての研修」への希望が多い。

（記入者　　佐々木　京）